

富士吉田織物市場に関する研究

—足利・川越織物市場との比較—

Keywords

織物 市場 富士吉田市
絹屋町 足利市 川越市

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

織物は古くからある日本の産業の一つであり、日本の発展に大きく関わってきた。織物産業は多段階の生産工程から生産・流通において複雑な分業体制であった。その中で、織物市場は織物の流通において大きな役割を持っていた。しかし、近代になるにつれて様々な要因から織物産業は衰退し、それに伴い織物市場の数も減少していった。

本研究では、甲州織の産地である山梨県富士吉田市の織物市場を対象とし、群馬県の旧足利織物上買場と埼玉県旧川越織物市場の二つの織物市場と比較を行い、富士吉田織物市場の特徴や変遷を明らかにすることを目的とする。

1.2 研究方法

- (1)現状の山梨県富士吉田市の織物市場の実測調査を行う。
- (2)実測調査から図面の作成と研究対象の建物に関する資料を収集・分析を行う。
- (3)同種の建物との比較を行い、建物の特徴や変遷を明らかにする。

2. 実測調査

実測調査：2013年10月11日

対象：富士吉田織物市場（絹屋町 高尾家住宅）

2013年10月12日

対象：山一産業燃糸工場

旧マルゴ家住宅(マルゴは屋号)



写真1 織物市場（高尾家住宅）写真2 旧マルゴ家住宅

3. 市の歴史

市は7世紀の頃にはすでに存在していたとされており、開設された当時は生産者と消費者の直接取引が主であったと思われる。その後取引は仲買を通しての取引が中心になっていった。絹や糸の商品としての流通は市で始ま



K10028 小川 知宏

り、個人取引から、仲買を通して江戸の間屋へというような商人取引が盛んに行われた。その後は、織物の市は市を通さずに買い取りなどを行う商人の存在や外国との貿易などに利用されたために衰弱していったと推察される。

4. 旧川越織物市場

4.1 概要

旧川越織物市場は、埼玉県川越市松江町にあり、市場としては明治43年に開設され、大正8年に幕を閉じた。

東棟・西棟・栄養食配給所・別棟2棟の計5棟の建築物があり、東棟・西棟・栄養食配給所が川越市の指定文化財を受けている。

4.2 特徴

織物取引に使われた木造2階建ての東棟、西棟が広場の両側に平行に並んでいる。この2棟は広場に対して土庇を出している。(写真3参照)土庇は奥行きが一間と広く、雨天に対する備えと商品を日差しから守るための機能であると考えられる。また、当時は繋ぎ屋根をかけ、雨の日でも軒に沿って移動ができるようになっていた。

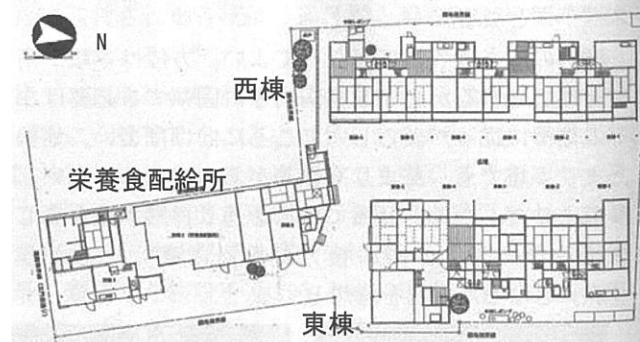


図1 川越織物市場配置図

広場に面した正面の開口は、すべてが開放できる構造になっており、全面開放することで広場と一体に使用できる織物市場独特のものと考えられる。



写真3 広場に面したファサード

広場に面した開口は格子戸と板戸があり、市を開く際は梁の裏側にせり上げて収納できる様になっている(写真5参照)。板戸の揚戸は川越の古建築では一般的に見られるが、格子戸も揚戸としている例は他に見られない。

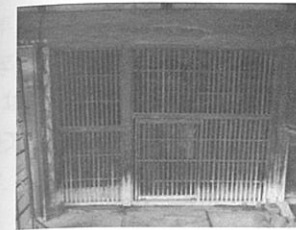


写真4 開口外観



写真5 内部の開口

5. 旧足利織物上買場

旧足利織物上買場は群馬県足利市にあり、現存する建物は、旧国道50号の南裏町通りと交差する道路の両側に建っている。当時は道路を中心に両側に建つ2階建ての建物が4棟建築され、2棟ずつ繋ぎ廊下で繋がり、平入り、和瓦葺切妻屋根を持ち、両平側に下屋が付いていた。現在は、ほとんどが火事などにより取り壊され、現存する2棟は道路の東側にあり、それぞれ住居と倉庫として利用されている。



写真6 倉庫外観

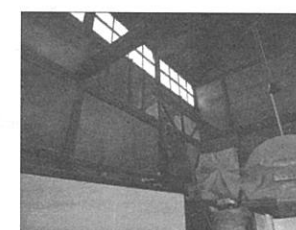


写真7 倉庫内観

6. 富士吉田織物市場

6.1 概要

富士吉田織物市場は昭和10年頃から昭和50年頃まで絹屋町と呼ばれる一帯の建物を利用し、市を開いていたと思われる。当時の市に使われていた建物の一つである高尾家住宅は9年前から住宅として利用されている。

名称：富士吉田織物市場（絹屋町 高尾家住宅）

所在：富士吉田市下吉田2-13-6

構造：木造2階建て

建築年代：大正13年

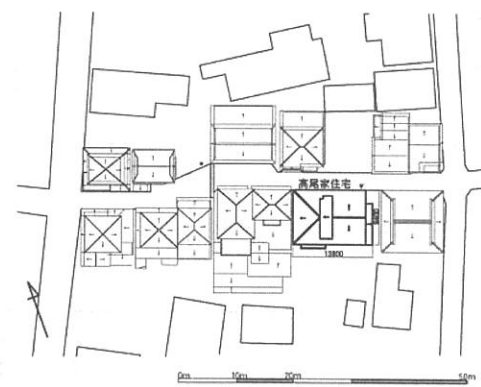


図2 絹屋町屋根伏図

絹屋町のある下吉田は富士吉田市のなかでも地域的に北部に属し、標高が低く、農業の阻害要因も少なく、地勢、気候などに比較的恵まれた位置である。そのため富士吉田の穀倉地帯といわれている。また他の地区に比べて、水田が多くあること、畑の中でも水掛麦の栽培が可能な畑が多いことが特色である。

6.2 背景

大正11年郷台町の東側に富士織物株式会社設立されたのをきっかけに糸屋や撚糸屋、染色屋が多く軒を並べた。その後、東京や大阪から絹織物問屋や仲買人が出張してくるようになり、絹屋町の住宅の座敷を間借りして1と6のつく日に市が開かれた。

絹屋町では卸問屋として市内の織物を仕入れ、仕入れた織物を大阪や東京の間屋や仲買人と取引を行っていた。当時の高尾家住宅では織屋に糸を買い渡し、織り賃を払い、糸を織らせ、できた織物を購入し、大阪や東京の間屋と取引を行っていた。

市に利用された建物は織物問屋が支店として自社の家屋を持っており、その建物を利用するものと貸間や出張所を利用するものがあつた。「貸間・出張所」とは店を構えていない問屋や仲買商が市日の時だけ住宅の一間なり二間を借りた。絹屋町の土地を持っている地主が家屋を建て、普段はそこに適当な人を雇って留守番をさせ、市の開かれる日には、織物問屋や仲買商などに貸した。より多くの貸間や出張所による収入を得るために、絹屋町では同じ家主による連棟式家屋も見られた。

6.3 高尾家住宅の特徴

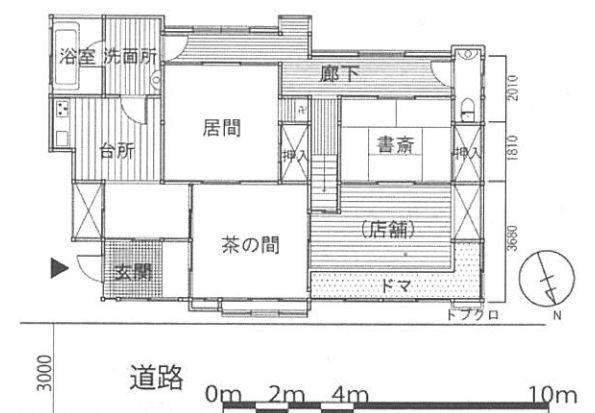


図3 高尾家住宅1階平面図

高尾家住宅は通常の住居部分と市の時に利用する空間が共存した住宅である。その理由としては商品を店の中に置き、取引を行う販売形式であつたためである。市を開く際にはドマの備わった板の間(写真8参照)を利用していた。板の間は北側の間口を開放することで道路と一体に使用することができ、織物の取引や織物の搬入を行なう空間として利用していた。店内で取引を行うため、庇や道路の幅員が他の織物市場に比べ小さいことが特徴である。

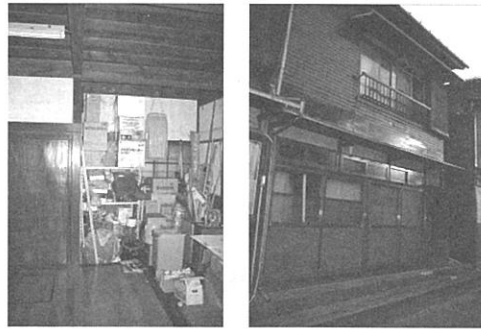


写真8 店舗の内部 写真9 店舗部分の外観

6.4 他の住宅との比較

高尾家住宅は増築部分を除いて考えると二列二室の平面構成をしている。二列二室は基本的な富士吉田の住宅とは異なり、土着的・農村的な特殊な計画性をしている鳥沢(現大月市)の19世紀中期の住宅や台ヶ原(現北巨摩郡白州町)の住宅の平面構成にみられる。

二列型は近世初期以来の平均的な屋敷の間口規模に対応する形式であり、民家形式を祖型として、オクへの発展過程を経て定着していった。ザシキ側の居室列を格式的な接客の場として表から奥へゲンカン・(ナカノマ)・オクノマを取っている。ザシキとゲンカンの境を板戸として、独立性が強く、ドマ側は一体化となっている空間が特徴である。

6.5 富士吉田の織物流通

養蚕農家などの糸の生産者が撚糸工場に渡し、工場で織機などを用い、加工を加えることで撚糸にする。工場できた撚糸は高尾家住宅などの問屋・仲買に送られる。工場から送られた撚糸を、市内の織手に渡し、織賃を払うことで絹に加工させた。そして、織手から渡された絹を市の際に展示し、東京・大阪などの市外の大きな問屋・仲買と取引を行った。商品の物流は主に自転車や徒歩で行い、市街の間屋に販売した際に運送会社を利用し、車などで東京や大阪に送っていた。(図4参照)

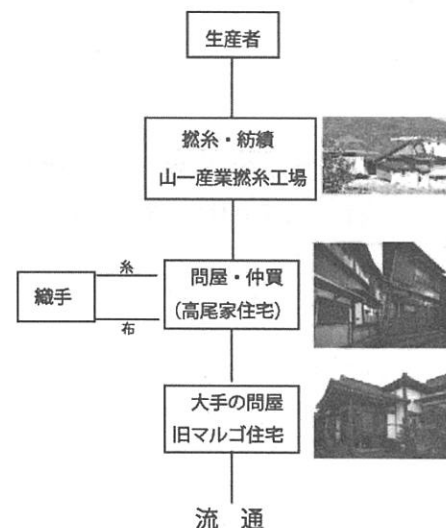


図4 富士吉田織物流通関係図

今回実測を行った山一産業撚糸工場では撚糸と染色を行っていた。山一産業撚糸工場は鋸屋根などの基本的な工場の形態を取っており、内部も壁で仕切られた大空間とその他のスペースが存在するなど、簡単な平面構成をしている。

旧マルゴ家住宅は他の仲買商などと呼んで会議などに利用されていた。特徴として、大広間には住宅としては珍しい伝統的な書院建築に用いられる蟻壁長押が付いているなど正式な近代和風の様式を有している。

6.6 絹屋町の変化

絹屋町は大正の後期から昭和の初期にかけて街が形成され、大正の後期から昭和10年頃までに宅地化が進んだと考えられる。(図5の色が付いているものは職業変遷がわかっているものである)

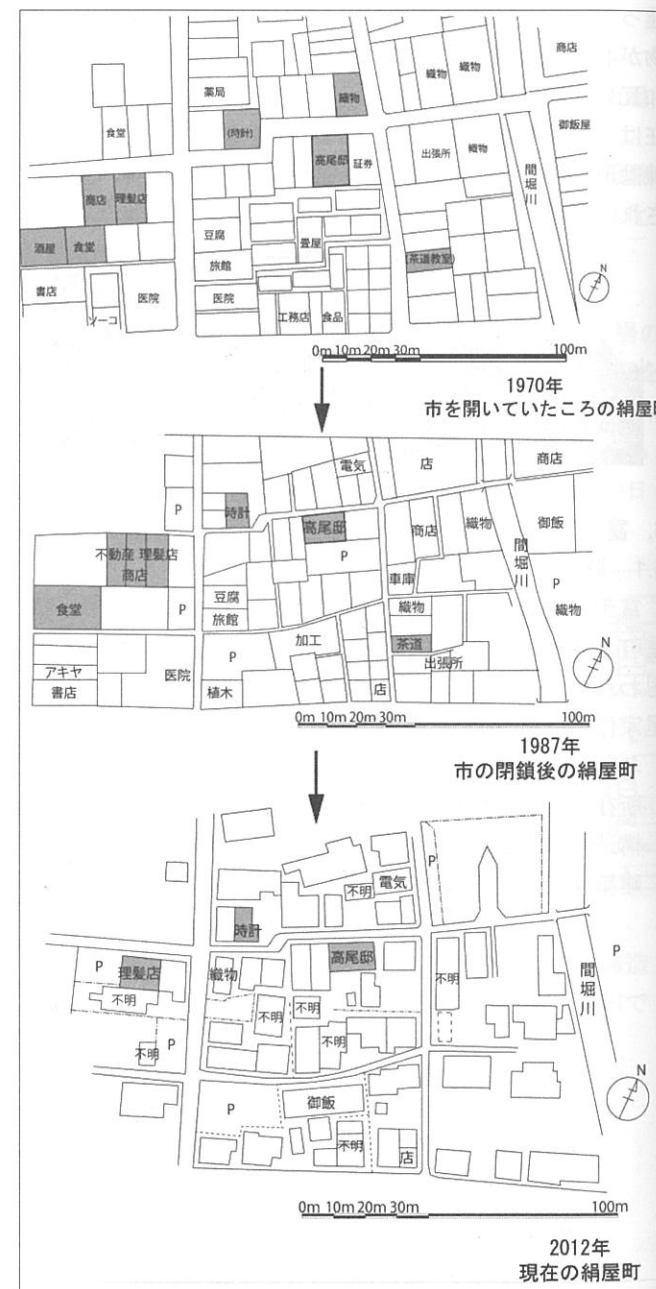


図5 絹屋町の変遷の様子

図5から1970年(昭和45年)の市が開かれていた頃は出張所などの織物関連の建物や商店などが点在している。市の閉鎖後である1987年(昭和61年)にも織物関連の建物は減少しているがわずかに残っている。しかし、2012年になると、織物関連の建物は確認できず、空き家や空き地が多く存在するようになった。

織物市場が絹屋町の職業に大きな影響を与えていたことがわかる。

7. 比較

表1 織物市場比較表

織物市場	富士吉田織物市場	足利織物市場	川越織物市場
特徴			
庇	奥行き50cm以下	奥行き50cm以下(現在)	奥行き1m以上
広場	幅員3.5m以下	幅員7m以上	幅員7m以上
開口	引き違い戸	引き違い戸	揚戸
商品	撚糸と絹(生地)	絹織物	綿・絹織物(太物も含む)
繋ぎ廊下	無	有	有
構造	木造2階建て	木造2階建て	木造2階トラス
形態	戸建	二棟連結	長屋
物流	自転車と徒歩	大八車	荷車
土間	有	不明	有
販売方法	陳列(店内)	店内	座売り・展示
商談相手	東京や大阪の間屋	不明	市内と市外
仕入れ先	市内の織物	市内の織物	市内の織物
経営	組合	組合	市
その他	住居機能を有する	倉庫が付属	寮として利用
時期	昭和10年~昭和50年頃	明治13年以降	明治43年~大正8年
現在	住居	住居と倉庫	川越市文化財

富士吉田・足利・川越の三つの織物市場の比較を行う。織物市場の共通点として、広場や道路を挟んで建物が平行に並んでいる、広場や道路に面して開口有していることがあげられる。これらは織物市場の基本的な要素であると考えられる。

7.1 形態

旧川越織物市場は地域の経済プロジェクトとしての役割を持ち、川越の古建築の要素を取り入れている2棟の長屋により構成されている。旧足利織物上買場は元々二つの場所で行われていた市を一つの場所で新しく開くことから、多くの人が利用することが予想され、2棟連結の建物で構成されている。一方、富士吉田織物市場は絹屋町にある住宅を貸間や出張所として利用するため基本的に戸建ての建物を利用し、市を開いていた。

7.2 販売方法

道幅が広く、大きい商品も扱う川越は外に商品を展示する形式をとり、繋ぎ廊下(渡り屋根)、奥行きのある庇(下屋)を設け、商品に日差しや雨に当たらないように工夫が施されていた。一方、道幅が狭く、小さい商品を店内に陳列し、取引を行っていた富士吉田では商品が日差しや雨にあたる心配が少なく、住宅を利用した建物であるため小さい庇でよかったと考えられる。

7.3 運搬方法

足利・川越は大きい商品も扱っていたため、商品を荷車に積み、馬などを用いて運搬していた。そのため荷車や馬が通るためにある程度の道幅が求められた。一方、商品が小さく、自転車や徒歩で運ぶ富士吉田の場合はそ

れほど大きな道幅を必要としなかった。そのため足利・川越の織物市場の道幅に比べて狭い道路でも問題がなかったと考えられる。



写真10 富士吉田の道路 写真11 足利の道路

8. 富士吉田織物市場の特徴

富士吉田織物市場の成立は富士吉田市が織物産地であること、織物が当時の経済の主体であり、大きな利益をあげるものであったこと、これらの時代背景も大きな要因である。富士吉田織物市場の特徴は貸間や留守番などの独自の職業だけでなく、市に利用する建物が住宅であることである。そのため道路または広場を挟んで建物が平行に並んでいる形式は他の織物市場と同じだが、他の織物市場と比べると道幅が狭く、庇が小さいものであった。

織物市場の成立後は職業や町の変遷から、出張所や貸間など、市の際に問屋や仲買に場所を提供する絹屋町の特有の仕事や建物もあり、町全体で織物関連の職業や建物が多く存在していた。織物市場の閉鎖後は空き家や空き地化が進んでいった。織物市場が絹屋町に住む人々に多くの仕事を与え、絹屋町の発展に大きく関わっていた。

9. 総括

本研究では山梨県富士吉田市の絹屋町で行われていた織物市場を対象に、足利と川越の織物市場と比較することで特徴と変遷について明らかにした。

富士吉田織物市場は他の織物市場と異なり、住宅を利用した織物市場として独自の職業を生み、発展し、絹屋町に大きな影響を与えた。現在も当時の姿を一部残す富士吉田織物市場は貴重な建築物である。

参考文献

- 1) 遠藤元男「織物の日本史」 日本放送出版協会 1971
- 2) 江井ひとみ 酒井聡子「旧川越織物市場の再生活用・印象評価に関する研究」2010年度芝浦工業大学卒業論文
- 3) 富士吉田市教育委員会「下吉田の民俗」 1990
- 4) 文化庁歴史的建造物調査研究会「建物の見方・調べ方・近代産業遺産」ぎょうせい 1998
- 5) 川越市「旧川越織物市場調査報告書」 2002
- 6) 川越織物市場の会「川越商都の木綿遺産：川越唐棧 織物市場 染織学校」さきたま出版会2012
- 7) 足利市教育委員会「足利市の近代化遺産」足利市教育委員会文化課 2003
- 8) ゼンリン「住宅地図」 1970、1987、2012
- 9) 山梨県「山梨県史」山梨日日新聞社 1999